

# 福田徳三の国際政治思想

## 山 内 進

### 1 はじめに

「何故の出兵か」という、シベリア出兵をめぐる与謝野晶子の一文がある。これは、1918年3月に書かれたもので、岩波文庫の『与謝野晶子評論集』にも載っている。日清戦争時に「君死にたまふことなかれ」とうたった晶子がこの出兵に反対しているのは当然だが、そこに次のような文章が記されているのは興味深い。

先ず私の戦争観を述べます。「兵は凶器なり」という支那の古諺こげんにも、戦争を以って「正義人道を亡す暴力なり」とするトルストイの抗議にも私は無条件に同意する者です。独逸流ドイツの教育を受けた官僚的学者にはこれを以て空想的戦争観とする人ばかりのようですが、一人福田徳三博士は「これを個人の間において言うも、相互間の親密を増進し、意志の疎通もつうを計るがために、先ず人を殴打するということのあるべき道理は決してない。国際間においても干戈かんかを以て立つということは、既に平和の破壊であって、正義人道とは全く矛盾した行動である。それ故に如何なる口実の下においても、戦争たる以上は正義人道の上から見ると変則であるといわねばならぬ。実に戦争そのものが正義人道を実現するものでないことは多言するまでもない」と本月の『太陽』で述べられたのが光輝を放って私の眼に映じます。私は福田博士と全く同じ考えを戦争の上に持っております<sup>1)</sup>。

与謝野晶子が福田徳三に言及しているのは、福田徳三が論壇の花形で、その筆

致に注目していたからであろう。むしろ、その内容に賛同していたからでもある。晶子は、福田や吉野作造が結成した「黎明会」の会員だった。

晶子自身はあきらかに平和主義者だった。戦争を褒め称え、正義の戦いと称することを拒絶している。だが、「君死にたまふことなかれ」の詩からイメージされるような情緒的反戦主義者ではなかった<sup>2)</sup>。晶子は「性急に軍備の即時撤廃を望むかという」とそうではなく、「ある程度の軍備保存はやむをえないことだ」とはっきりと述べている。ただ、「これは決して永久のことではなく、列国が同時に軍備を撤廃し得る事情に達する日までの必要において変則的に保存される」だけだという。そして、こう続ける。

その「或程度」というのはあくまでも「自衛」の範囲を越えないことを意味します。それを超れば軍国主義や侵略主義のための軍備に墮落することになります。私は日本の軍備が<sup>つと</sup>夙にこの程度を甚だしく越えていることを恐ろしく思っております<sup>3)</sup>。

この冷静な筆致には驚きを禁じえない。だが、福田徳三ははたして晶子と「全く同じ考えを戦争の上に」もっていたのであろうか。大正デモクラシー期に燦然と輝いていた福田は与謝野晶子にも注目されるほど論壇で活躍していた。そこで彼は戦争について、あるいは国際政治についてかなり縦横に語っている。平和についても語っている。しかし、彼は、与謝野晶子がいうのとは異なった意味で、そうとうリアルな視点からこれを語っている。それはまた、今日の外交感覚からするとかなり独特だった。これは、福田と並ぶ大正デモクラシーの論客、吉野作造がいまなお名声を保っているのに、福田がほぼ忘却されていることとも関係するように思える。

そこで、私はここで福田の国際政治思想、とくに「戦争」と「正義」という観点からみた彼の国際政治思想を考察してみようと思う。

## 2 「何の為に戦ふ」

まず、与謝野晶子が引用したところから始めよう。これは、1918年3月に『太陽』に掲載された「談話」である。引用直前の文書は次のとおりである（漢字は新字体に変更した）。

元来我国は世界の正義人道とか、<sup>ドイツ</sup>独逸を全滅するとか、其の軍国主義的政府を倒すとか、<sup>プロシヤ</sup>普魯西の政体を変更するとか云ふことの為に、対独宣戦をなしたのでは断じてない。併しながら国際間に現れる、善美なる問題に對し、日本は日本の立場よりして一致し得ることに飽までも一致して行く。是れは今度の戦争に限ったことではなく、文明国存在の根本義である。<sup>併し</sup>併此の根本義と戦争に従事した目的とは同一ではない。彼の平和の為に戦争すると云うことは甚だしき矛盾であると謂はなければならぬ。是れを個人の間<sup>に</sup>に就いて言ふも、相互間の親密を増進し、……<sup>4)</sup>」。

「<sup>ドイツ</sup>独逸を全滅するとか」という表現から伺われるように、福田は一般的、抽象的に反戦を主張しているわけではない。「正義人道」の具体的語り手を念頭において論じている。その語り手とは、ほかでもないアメリカ合衆国大統領ウッドロー・ウィルソンだった。

与謝野晶子が福田から引いた最後の一文「実に戦争そのものが正義人道を実現するものでないことは多言するまでもない」は、実は間が飛ばされている。「変則であるといわばならぬ。」に続くのは、「米国大統領ウエルソンの宣言の如きは、政治家の言論としては立派であるけれども、是れを正義人道の上より見れば、大なる瞞着の辞と謂わなければならぬ<sup>5)</sup>」であり、それからかなり後で「実に…」の文章がでてくる。与謝野はカットしたが、福田はウィルソンが「正義」や「人道主義」の名のもとにドイツと戦っていることを批判し、その文脈のなかで戦争と平和は相容れないこと、戦争は「正義人道」と矛盾すると主張していたのである。彼はいう。

縦令<sup>たとへ</sup>今回の戦争に於て、独逸を滅ぼすことが出来たにしても、戦争は決して世界の表面から跡を絶つものではない。然るにウキルソンの声明する所によると、米国が大いに動員して戦争に参加した所以<sup>ゆえん</sup>のものは、向後世界の表より戦争を根絶せしめる為めであると言って居るが、是<sup>こ</sup>れは瞞着<sup>まんしやく</sup>の甚だしきものである<sup>6)</sup>

そもそも福田にとって、「既に一度戦争を開始したと云へば、其のことだけで正義人道を完全に実行して居らないことを意味する」。しかし、それでは戦争は正義人道に外れたものとして完全に法の拘束をもたないのであろうか。そうではない。福田はこういう。「唯だ我々文明国民は一步正義人道を踏み外して戦争を始めても、戦争に当って戦争を遂行する必要以外に正義人道から外れないようにし、でき得る限り戦争の害毒を限局することに努力す可きである。実に戦争其の者が正義人道を実現するものでないことは多言するまでもない」。

この表現から判断すると、福田が戦争と正義人道とは無縁だというのは反戦平和主義というよりも、伝統的な国際法実証主義に由来する。国際法実証主義は、戦争当事者のいずれかを正しいとする正戦論を否定し、戦争実施時のルール(戦時国際法)のみを規範化するもので、当時の国際法学の基本思想を織り成していた。福田は戦争を否定するから戦争と正義人道との連結を嫌ったのではない。戦争は国家主権の発動であり、一方の側のみを正しいとする正戦論をとらない(無差別戦争観)から、これを否定したのである。

福田が反戦平和論者でないのは、彼が「東洋の平和維持のため」ドイツの支配していた青島を奪取することを対独宣戦の目的だと主張していることから明らかであろう。しかも、その目的は果たされたのだから、重要なことは「その領土を独逸に返還しない」ことだと言いつ切っている。もちろん、福田は侵略主義者ではなかった。むしろ、戦争目的を青島奪取に限定することによって、日本の戦争への深入りを否定しようとした、といてよいだろう。しかし、「世界の平和を害する嫌ひない限りは、単なる正義人道の口実の為に、既得の権利(つまり青島一筆者)を軽々しく放棄してはならぬ。斯くの如きは<sup>ひつきょう</sup>畢竟国家の存在を無視

する所以である」という。これは、国家主権を重視する者の発言である。

### 3 姉崎博士の空想的世界観

姉崎正治という学者がいた。東京帝国大学文科大学教授で、福田と同時代に活躍した。宗教学が専門だが、狭い意味での宗教ではなく、道徳精神論において光彩を放った人物である。彼は「大正革新の精神を振起し、内は国家成立の本義を發揮し、東洋文明の代表者たる実を挙げ、外は国際正義の擁護者となり、大に世界文化の進展に寄与する」ことを目指した「婦一協会」叢書の編纂者であった。

本論文との関係でいうと、彼が擁護しようとした「国際正義」が問題である。国際正義を擁護して悪いことなどなさそうだが、福田はそれを「瞞着」だと言い切っていた。姉崎はその「瞞着」の有力な主張者だったから、福田はこれを厳しく批判した。批判は「ホッブスとグローシアスとを論じて姉崎博士の空想的世界観を排す」という評論で行われている。

福田の学識と鋭利なリアリズムをよく伝えているこの評論は主に二つの論点もっていた。一つは姉崎の国際政治思想・政治史の誤解の指摘である。その二はそれによってたつ姉崎の「空想的世界観」の「大謬想」の指摘である。まず、その第一の論点からはじめよう。

福田が批判するのは姉崎の「戦後の世界がどうなるか、をどうするか」(『中央公論』1917年11月号)という評論中のつぎの一文である。

一七世紀の三十年戦争は、ヨーロッパ大陸を焦土にした。数百の諸侯が入り乱れて戦ひ、戦った結局は、大体フランス文明が世を支配するに至った。然し国勢の消長といふことよりも、——今日から顧みて重大事であったのは、三十年の戦乱に、或いは驚き、或いは悲しみ、或いは又深く考えた思想界に、二大勢力の出た事である。即ち一は『人間と人間とはやはり狼と狼だ』Homo homini lupusだといふ暴力謳歌と、一は戦闘殺戮の惨に拘らず、人道には義もあり理もあるという思想と、此二つ、一はホッブスが之を代表し、一はグロチウスが之を代表した。ホッブスの思想は、一九世紀になって、ダーウキンの進化

説を誤解し曲解した勢力本位の帝国主義となり、グロチウスの正義は、その後の戦乱毎に、主義と條規とを充実して、正義尊重の流となって、今日に及むだ<sup>7)</sup>。

姉崎は、ホッブスを「悪魔的思想」、グロチウスを「天使的思想」の代表者とも呼んでいる。しかし、福田はこれを根本的に誤っていると批判した。グロチウスは国際法では著名だが、その政治哲学は浅薄であって、ホッブスの比ではない。むしろ、欧州の政治哲学を支配したのはグロチウスではなく、ホッブスである。「姉崎博士が、正義と人道の理想が行われたと云ふ十八世紀は、十七世紀にもまさりてホッブスの影響を受けて居る。其大思想家はカントを始め深くホッブスに学んで居る。博士の言はれた様にグローシアスの勝利ではなくして、寧ろホッブスの勝利である。是は具体的事実であって、我輩一個の解釈ではない<sup>8)</sup>」と。

#### 4 グロチウス

福田は一般論にとどまらず、グロチウスとホッブスの思想のそれぞれについて分析を行っている。グロチウスについては主著の『自由海論』と『戦争と平和の法』を扱う。

福田によると、まず『自由海論』は姉崎のいうようにただ「正義、人道のみを主張した」ものではない。それはポルトガルの東インド貿易独占に対する、祖国オランダのための反論の書であった。「グローシアスの此の著述は、空想的産物ではない。国家当面の実際問題を無視した学者の閑事業ではない。最も重大なる国家の利権に関する問題を解釈するために著された」ものだった。このことをもって、グロチウスを批判することはできない。これは尊重すべき行為である。福田は、ウィルソン米国大統領の人道主義を高く評価する姉崎を皮肉っている。「日本の具体的権利を度外視して、幾多の事件に於いて日本の利益を踏み躪りつゝある所の米国の大統領の教書に日本人であり乍ら、随喜の涙を流すが如きは、決して『自由海論』を著はした時のグローシアスの心事ではなかった」と。

一方、『戦争と平和の法』に対する福田の評価は低い。「グローシアスと言へば、経済学に於けるアダム・スミスの『国富論』の如く、読んだ事の無い者まで賞賛する。併し乍ら、之を一読すると、其の印象は著しく変わって来なければならぬ。思想は兎に角、形式は煩雑であって、卒読に堪えない。…是に由って見れば、口を極めてグローシアスの『戦争と平和』を賞賛する人の中には、実は自分で読んだ事の無い人があるらしい」。福田はラテン語の原文は十分に了解し得ないので、英訳を読み、バルベイヤクの仏訳を読んだけれども、これは「実に錯雑したものである」という。福田は正直である。『戦争と平和の法』が晦渋だということには私も賛成である。たしかに、これは読みにくい。その自分の体験を踏まえて、福田は姉崎を半ば揶揄している。

姉崎博士は、正義、人道の思想の代表者として、グローシアスを挙げた。博士は、果たして此の煩雑なる『戦争と平和の法』の何れの部分に如何なる文字を見出されたのであろうか。詳しくは書いていないから、我輩には分からないが、想ふに、大体に就いて言われたのであろうと想ふ<sup>9)</sup>。

福田はグロティウス思想の出発点が「ドメスチック・インスチント」（社交本能）や「キンドレッド・フィーリング」（同胞感情）にあることを適切に指摘し、グロティウスがそこに自然法の淵源を認めたことを確認している。だが、そのような感情があるにもかかわらず社会契約を行うことを矛盾とし、「国家並びに主権の起源及び存在の理由を、自然法から説明するか、社会契約から説明するか、ふぶんめい不分明である」と批判する。またグロティウスは「主権を以て財産権の如き私権と見、譲渡、分割が出来ると言っている」。これは「矛盾と云ふ外はない」。たしかに、痛いところをついている。この論点は現在においてなおグロティウスの「近代性」に対する疑念の焦点となっている。

福田はさらに、グロティウスの自然法思想が「神の旨」に異ならないという欠点をもっていることを指摘する。というのも、人によって「自然法」の内容もまた異なるからである。「人々が各々其の信ずる所の『自然法』若しくは『神の旨』

なるものを以て、国家の法律に対抗し君主の命令に対抗する時、何人が何によって其の正否を判断するのであるか。これに対して「ホッブスは明らかに其の最後の判断者は主権者とその法律あるのみと断言して曖昧を許さない」。

此の状態は、国際間にあっても同様である。在る一国が、『自然法』『神の旨』を振りかざして他国に臨む時、相手の国は、何によって、如何にして其の然らざるを証明し得るか。現に英米国は、正義人道は自国の専売に属し、敵方は一から十まで非理を取てするものだとして居る。英米人ならざる我々は誰か鳥の雌雄を知らんやと云い度くなるではないか<sup>10)</sup>。

## 5 ホッブス

もはや明らかなように、福田はグロティウスよりもホッブスを好んだ。福田がホッブスを好んだのはその明快さと「正義人道」ではなく自己保存論を基軸とした理論構成であろう。彼はその観点から、ホッブスの『リヴァイヤサン』の基本思想について紹介を加えている。この紹介は短いが的確で、福田の読解力をよく示している。

しかし、彼の理解をここで逐一追う必要はない。重要なのは、福田がとくに重視したことである。それは、社会と国家が個人の生命の安全のための個々人相互の「コブナント(約束)」によって形成されるというところである。福田はいう。「権利を互に他に譲り合う事を、契約と云ふ。社会は、此のコブナントによって出来たものである。即ち、自然の状態に於いては、競争、怯懦、<sup>きょうだ</sup>名誉心の為めに、争闘が絶えない。之れを免れる為めには、『コブナント』を結んで社会を作らなければならない」。これが社会契約である。

ホッブスにとって、契約の思想の要は人間相互の明確な意思の合致にある。「コブナントは、獣類とも結べず、神とも結べない。人間同志の間にしか結べない」と。彼が斯く言ったことは『神の旨』なりと称して、主権に干渉せる者を一挙にして打破した所以である。ホッブスの一大功績は、教会が『神の旨』と称して、政治に干与しておった途を杜絶した事である。これ『神の旨』を説いたグローシ

アスの速く及ばざる所である<sup>11)</sup>」。

グロティウスが積極的に「神の旨」を説いたとは思えないが、その自然法論が個人の意思の合致を超える普遍的正義の思想と不可分に結びついているのは確かである。また、福田は指摘していないが、ホッブスがこの点で、普遍的真理や普遍的正義を否定したことも確かである。ホッブスにとって、正義とは正不正を確定することを認められた権力の決定するものにほかならない。その権力が主権であり、主権が決定する正義が法律である。国際社会ではそのような屹立した主権的権力は存在しないから、正義はない。あるのは合意（条約）だけである。

ホッブスが「狼の噛み合ひを鼓吹する」学者でないことは確かである。そのような状態を否定するのがリヴァリアサン設立の目的であるから、これは明らかである。ただ、主権が及ぶのはあくまで国内にととまり、リヴァリアサン相互はより強い力に服さない。したがって、国際社会は自然状態であり、狼の噛み合いの世界となる、という認識はあり得るであろう。この点については、福田はなにも語らない。

しかし、「人生を以て狼の噛み合ひの如くせざらんとする事が、ホッブスに従へば、社会存在の根本義である。而して此説は殆ど其儘<sup>しか</sup>一八世紀の終に於いて極力『永遠の平和』を主張し、又ルソーの思想を喜んで取ったカントによって繰り返されている」と福田は記している。このようにカント的平和論へのホッブスの影響を示していることを考えると、福田は少なくとも国際社会＝闘技場という判断をもってはいなかったと思える。むしろ、正義を振りかざし、他国の主権に介入することこそ問題だ、と福田は考えていた。

福田のホッブス像はかなり理性的である。そこから導かれる国際社会像もまた、個々の主権国家が自己の利益を追求しつつも、勢力均衡をめざし、生存を脅かされない限り妥協し、合意する世界というところであろう。これは、やはり国際法実証主義的世界観といえるだろう。

## 6 オートクラシー対デモクラシー

「過去の学者に対して、全然妄断<sup>もうたん</sup>、曲回とも言ふべき評論を加えた姉崎博士は、

現在の問題に関しても又た見脱す可からざる空想に耽って居る。過去を知らない博士は、現在をも知って居ない。然れば、『戦後の世界がどうなる、をどうするか』と言って未来を談じて、甚だしき誤謬に陥ったのは、寧ろ或いは当然である。福田は、最後に姉崎をこう批判している。では、その「甚だしき誤謬」つまり福田の第二の論点とはなんであろうか。

福田によると、姉崎博士の考えは次のようなものだった。「即ち博士は狼の咬み合ひの如き十九世紀は、此の戦争で終を告げ、戦後の世界は、グローシアスの正義、人道が世界を支配する様になり、此の度の戦争の如きは、跡を断つ様になるか、若しくは容易に起こらない様になるに至るであろうと考へている様である。従って、此方針に向って国是を立つ可く、ウエルソンの教書を人類独立の宣言として奉戴せよといふ。併し、是れは、大謬想というべきものである」。

福田がそう主張するのは、世界が平和になるとは考えられないからである。「米国の大統領が美はしい文字を臚列した教書を発したからとて、それを米国の真意と思ふのは、大きな間違いである」。たしかに、世界はオートクラシー（独裁主義）からデモクラシーへと移行しつつある、という表現は可能であろう。「此の点に関しては、吉野博士の論ぜらるゝ所、姉崎博士よりも、はるかに傾聴に値する」。ただし、イギリス、アメリカが著しくデモクラチックになるということは、容易には断言できない。

福田は、イギリスとアメリカに対してもリアルな目を失わない。彼もまた、この戦争をオートクラシーとデモクラシーの戦争と見られないこともないというが、その意味は「吉野博士、姉崎博士の解釈とは異なっている。オートクラシーが独逸側、デモクラシーは連合国側とするのは、間違いである」。イギリスもアメリカも立派にオートクラシーへと動いている。「今日、世界最大のオートクラットはロイド・ジョージである」。日本が注意すべきは勝者であり、そのことによりオートクラシーへと向かう英米両国である。「然らば」と福田は主張する。

戦後に対する日本の国策は、之を出立点としなければならぬ。即ち、狼の咬み合は寧ろ是れより始まるのであって、グローシアスの正義人道の支配する時

代は容易に来るものではない。我々は姉崎博士と共に、ウキルソン大統領の空言を臚列した教書に感嘆の涙を流すが如き余裕は、寸毫も有しない。むろん『世界を敵として戦う覚悟と準備』などは必要でない。併し乍ら、過去に於ては世界の最大陸賊国海賊国であった英国や、近く比島や布哇を併呑した米国から我国に対して起り来るべき問題が、如何なる性質のものに属するかは、殊に細心の注意を要するのである<sup>12)</sup>。

福田にとって重要なのは、正義であれ人道であれ、特定の主義ではない。国家の存立、それだけである。戦うのは日本の主権が犯されんとするとき、そのときだけである。「我々はオートクラシーの支配する時、オートクラシーが我国を圧迫する時、之と戦はなければならぬ。他国の軍国主義が我邦を脅かすときは之と戦はねばならぬ。是れは国の外たると内たると、独逸たると、英吉利たると、アメリカたるとを問わない。而して単に正義、人道云々の空言空想の為めには、決して戦つてはならぬものであると確信する」。福田はそう主張した。福田はウィルソンのアメリカに人道と正義ではなく、むしろオートクラシーという覇権主義を認め、それと戦うことを宣言したのである。

## 7 福田のリアリズム

福田は国際法実証主義者であり、リアリストである。その冷徹な目はウィルソンの言葉の背後にあるアメリカの覇権主義的傾向を見落とすことはなかった。第一次世界大戦中に米国からの提案によって「自主的出兵」をすべきか否か論ずるなかで「独逸の軍国主義が世界の平和を脅かすよりも、英国の商業主義、海賊主義の方が、今日まで世界の平和を脅かして居たこと数十倍の上に出で、居るは、少しく歴史を知るものゝ拒否し能はぬ所である」と主張し、こう断定している。「日本を離れて世界全体として見ても、今の処『禍』と名づく可きものは独禍ではない。寧ろ英米禍である。独逸を全滅することは決して世界平和の必要事ではない。英国のヘゲモニーの何分なりとも減殺せられる方が世界平和の保障としては、遙かに意義ある出来事たることは疑いを容れぬ<sup>13)</sup>」。

さらに、福田の矛先はアメリカへと向かう。いや、それこそが本命だった。アメリカがドイツ全滅のためと称して軍国化を進めるのは日本にとって危険である。アメリカの軍備の完成の暁には世界平和の保障となるよりも、世界平和のメネース(脅迫)となるであろう。しかも、福田にとって、日本がどこよりも戦争を避けねばならない相手はアメリカだった。なぜなら、「米国と戦へば、米国との貿易は杜絶し、其結果我国民の生活は極度の困難に陥る」からである。「米国との関係は絶対的に不可忍に立到るに非ざる限り決して之を絶つ可きではない。余程の辛抱を敢てしても唯戦争を避け得んが為めに我国は全力を尽さねばならぬ」。アメリカは危険であると同時に、日本にとってもっとも戦争を避けねばならない存在だった。そのアメリカの軍事力を高めるような、日本の欧州への「自主的出兵」など断じて避けねばならない、と福田は強調した。

ウィルソン大統領が正義人道のために連合国の一員である日本に派兵を求めるとしても、それにしたがってはならない。「日本が英米其他の与国の為めに強請せられて、心にもなき出兵を断行するが如きあらば、其れこそ国を危殆に導く所以である。左様な強要を為す国ありとせば其国こそ真に日本の敵である。独逸の如きは、之に比すれば遙かに小なる敵である」。福田にとって、アメリカの要請は「強請」に等しかった。それに従うことは主権国家の採るべき道ではない。ウィルソンは、アメリカのためではなく、正義人道のため、デモクラシーのためだというだろう。だが、それはありえない。福田はここでも明快である。

此く云ふは、決して欧州戦争を他人の事視するからではない。日本あるを知って世界を顧みぬからではない。況んや区々たる物質的利益の打算からではない。軍隊の存立の根本義から立論する所以である。外の与国は他国の戦を辞せぬとするも、我が日本の軍隊は日本の為めに已むを得ずしてする日本の戦争の外は、決して戦争に従う可きものでないからである<sup>14)</sup>。

福田がリアルな国際法実証主義者であることがここでも明らかに示されている。戦争は主権国家の国家利益のため以外にはありえない。「悪を化して善とし、悲

しむ可きを化して喜ぶべき事とする、其一切の最高の標準は、国の為め、国の存在の為めと云ふ一事である。此を取り除くときは、戦争は飽迄悲しむ可き事、避く可きことたるを免れない。欧州に出兵し、国際の正義や人道のための戦争を行うなど、日本の存在という重大事のためでないことに国民の生命を危険にさらしてはならない。福田は、そう主張した。まして、ウィルソンは「天使でも聖人でもない」。ウィルソンは虚言も吐けば策略も弄する政治家である。「米国式偽善」に目を奪われず、「現実の上に立て」と福田は強調する。

吾人は今の時に於ては空想に耽る自由を有さない。戦後の世界はどうするにしても、先づその前提としては、世界各国がどうなって居るかの現実、世界各国の状態がどうなるのかの現実を充分熟考しなければならぬ。然らざればそれこそ却って国を危きに導く所以である<sup>15)</sup>。

#### 8. 空想か理想か

福田によれば、姉崎は空想的で、「学問を無視し、理性を蔑ろにして曖昧、不徹底、矛盾を極めた謬説」を奉ずる者である。しかし、空想と理想は紙一重である。姉崎は理想を語ったつもりであろうし、自分の認識を謬説とも思っていなかっただろう。ただ、姉崎の政治思想史はたしかに粗雑で、グロティウスやホッブスを自ら綿密に読んだ上で、二人の名をあげたとは思えない。この点で、福田は正しい。

しかし他方で、現代においてなお、国際関係思想を大きく類型分けするとき、ホッブスとグロティウスとカントの類型という3つがその基本型とされていること、グロティウスについていえばとりわけグロティウス主義や新グロティウス主義という学問的、政治的立場があった、ということは指摘しておかねばならないだろう。これは類型論なので、必ずしも実際の理論と同一である必要はない。また歴史的にいうと、第一次世界大戦後、国際の正義人道の主張は、主としてアングロ・サクソン世界で、しばしばグロティウスの名のもとに言わば正戦論として語られ、実行された、ということも忘れることはできない<sup>16)</sup>。

姉崎がリアリズムに欠けていたのは確かである。ホッブスとグロティウスに関する理解でも、現実認識の面でも、明らかに福田の方が優れている。それにもかかわらず、姉崎の「空想」にはそれなりの裏づけと歴史の流れに対する的確な洞察があり、「理想」と呼び得る要素をもっていたように思える。姉崎はその観点から次のようなウィルソンの「ドイツへの宣戦布告」を引用する。

現在ドイツが行ひつゝある潜航艇戦は、実に人類に対する戦闘である。あらゆる国民に対する戦闘。……全人類に対する挑戦である。何れの国民も、各々之に対する態度を決すべきである。……

……

我国の目的とする所は、我利専制の暴力に対して、世界の生活における平和と正義との主義を主張し、以て真に自由に自治の実ある人民の間に、目算と実行との一致を建設し此に依りて此等の主義を守るべき保証を確立するにある。

不義を遂行したる者ある場合、之に対する行動と、之に対する責任とが文明国民の個人間に行はるゝと同じ標準を以て、諸国民政府の間にも行はるゝに至るべきを要求する。而して此の要求が、実行せらるゝに至るべき新時代は近づきつゝある<sup>17)</sup>。

姉崎には「新しい時代」の到来という認識があった。彼はそれをこう明言している。「…眼前現実以上に眼を驅せる事が人生の指導には必要である。戦乱の最中にも、達見の人は、戦乱から抜け出た新たな世界を望むで、之を指導する。之に反して戦後経営などゝ唱へつゝも、現実に捕はれた人々は、戦後の世界をも、やはり今までの旧世界の標準で判断する。然るに、戦後といはず、戦乱の現在にも、既に世界新局面はその面影を見はしつゝある。戦場の血潮のなかには、人間は猛獣の悪性を発揮しつゝあるが、其と共に菩薩の善心もその中に一層強烈に現れ、国家競争の惨劇が其の惨禍を逞しうつゝある今日、既に国際協調、人道正義の理想は其の力を現はしつゝある。我々は現実に対して目をつぶってはならぬ。…而して戦後の世界には、戦前に似た競争も行はれる事を承認すると同時に、此の如

き大動乱の後には必ず新局面が開けて、今までに見ない新傾向、新勢力の生ずる事をも覚悟すべしである<sup>18)</sup>」。

姉崎にとって、グロティウスとホッブスとの対照も、「単に人生がどういふ者である、世界がどうなろうといふ事だけで」はすまない。「その思潮は各々流れて人生を動かす力となり、正義の指導で人生を動かすべきか、将た又狼の如く噛み合いの人生とすべきかといふ、思想、理想、努力、行動となって、二百年來の世界を支配し、而して現在の戦争にも此の二潮の流争が明らかに現はれて居る。我々は、戦後の世界に処して、此の二潮流の流れに加担し、それを如何に変発し、若くは変形し、実行すべきか、此に問題が存在する」。論点は、国際政治におけるホッブス主義をとるか、グロティウス主義（またはカント主義）をとるかにある。

これは、福田流のリアリズムにはない視点である。姉崎は、ホッブスの主権国家を中心とする国際法世界がより協同的なものへと変わりつつある、という認識をもっていた。したがって、彼にとって重要なのは、その大きな流れにのることだった。のらなければ取り残されるだろう。それどころか、滅びるかもしれない。そのような思いを彼はもっていた。

「大戦の終期と戦後の新局面」という姉崎の評論には、そのような判断が色濃く伝えられている。「戦争中、又戦争の結果、国際法の無力は無慈悲に暴露せられ、国と国の間には何等の義も法もないといふ事を明示して居るではないか」という疑いに対して、彼は、三つのことを挙げて批判している。

1 すべて法律は社会の変遷とともに変遷しているのに、多数の日本人は成文法のみを法律と見る偏見のために、国際法が矛盾衝突の間にも発達しつつある事実を看過している。

2 すべて問題が生ずるのは、事情勢力の不均衡から生ずるので、現在の戦争で困難な問題が続発するのは事情の変遷にしたがって、国際法の規定に変更を要するためであり、決してその法の無力のためではない。

3 「今度の戦争で、難問が解釈できない事の続発して、今までに類例のない程であるのは、国際法の無力を証する者でなくて、却て正義の観念が強く現はれ、而してそれだけ強い主張を貫きつつあるしるしである。即ち、三十年戦争の後にグロチウスの出た如く、今度の戦後には一層偉大なグロチウスが出て(一人であるか、多人であるか、又は団体であるかは、勿論不明)、而して一層立派に周到なる国際正義の條目を整へ、一層強くその観念を世界に与へ、それに依って国際道義の勢力は一層加はるに違ひない<sup>19)</sup>。

この道は、たしかにアメリカとイギリスの進もうとする方向だった。福田がいうように、アングロ・サクソン世界がそれほど単純に国際の正義を主張したと考えるのは空想の類に属するであろう。だが、姉崎の空想には、福田的リアリズムにはない別種のリアリズム、勝つ者に付く的なリアリズムがあった。姉崎はいう。「戦争中、連合側が、利害作戦と共に、精神主義に於ても結合の勢力を示してきた事実は、今後の世界的運動に対して、必ず何かの結果を生むに違ひない。イギリスの社会学者ホブハウスの如きは、世界将来の希望は、一に係かって此の一事にあると考へて居る。此については、尚ほ考ふべき点が多いが、兎に角、戦争の惨害に拘らず、否戦争の為に却て、世界的運動の気運があらゆる方面に起こりつつある事は、頗る重大事であって、今後の列国中、此の気運に乗ずる者は与り、之に背く者は滅びると断言して憚らない。日本国民の最も覚醒すべき点は、軍器の自給や、経済の自立といふ如き鎖国的傾向の気風ではなくて、世界的気運に乗じ、此と歩調を保つといふ雄大な開国進取の精神にある<sup>20)</sup>」。

「開国進取」には違ひないかもしれないが、「此の気運に乗ずる者は与り、之に背く者は滅びる」という判断がその「精神主義」への負担を支えていたのである。

## 9 結び 福田はなぜ忘れられたか

福田はリアリストを自称し、国際政治の現実の動向に眼を光らせていた。現実から出発すべきだと繰り返し、ホブスを高く評価した。しかし、彼の現実主義の基軸にあったのは権力主義ではなく、国際法実証主義であった。国際社会の無

軌道を強調して戦争による決着を声高に唱えることはせず、軍国主義には反対した。しかし、主権国家の自立性を尊重した。勢力均衡を国際政治の基本原則ととらえ、英国やアメリカの世界支配を嫌った。とくにアメリカが国際の正義と人道の名のもとに覇権主義的行動をとることに敏感に反応し、その動きを抑えることに努めるべきだと主張した。この主張は、主権平等の観点からすると間違っていない。正義という観念はおおむね主観的で、諸国家はそれぞれの正義をもつから、戦争に正義をもちだすことはできないと一般に理解されるからである。福田が危惧したように、アメリカはその後、そして今もなお国際の正義や自由という原理を名目として戦い、その覇権を拡充している。

しかし、その一方で、福田は国際社会の協調への動きを過少に評価したように思える。少なくとも積極的に荷担しようとはしなかった<sup>21)</sup>。柿崎はそうではなかった。そして、福田とともに黎明会を作った吉野作造もまた、福田よりもはるかに鮮明に国際主義的、理想主義的立場を明らかにしていた。例えば、吉野は「米国大統領及び英国首相の宣言を読む」(1918年)で、ウィルソンやロイド・ジョージによる国際正義の尊重と国際連合組織の計画を高く評価し、こう述べている。

真面目なる人の真面目なる思想は、或る場合に於ては武力よりも強い。吾人は戦後直ちに国際連合組織の創設あるべしとは軽信しない。又創設されても固より初めから完全なものとも思はない。併し乍ら戦後に於いては、国際協力の力によって法と正義を擁護し、又協力の力を以て武力を恃む或る一国の跋扈を抑へようとするの主義、従って又凡ての国が誠意を以て協力するといふ主義が、国際間の通義となり、又各国銘々の基本方針となるだろう、此の爲めに或る種の国際組織が実現するだろうとは、予輩の深く信じて疑はざる所である<sup>22)</sup>。

福田とて国際連盟の設立に反対していたわけでも、否定していたわけでもない。吉野もまた、リアリストでなかったとはいえないだろう。しかし、基本的姿勢、その向かうところに違いがあった。福田は国際政治に正義や人道の要素が入るの

を嫌ったのに対して、吉野はそこに時代の趨勢を見た。福田は正義や人道を唱える英国やアメリカに覇権への衝動を強く感じたのに比し、吉野はそこに「真面目な思想」を認めた。福田はアメリカを日本にとって最大の敵となるだろうと考えたのに対し、吉野は平和主義や協調主義の担い手としてともに歩むべき存在と理解していた。

吉野のこのような考えは、日米関係改善のために取り交わされた、いわゆる石井ランシング協定(1917年11月)への論評でもはっきりと示されている。吉野はいう。「故に日米共同宣言の発表は、或意味に於いて我々日本国民に<sup>どいつ</sup>同じやうに国際間の協約など言ふものは一片の紙屑に過ぎないといふような態度に出るか、或は米国や英仏等によって代表さるゝ飽くまで道義をして力に勝たしめようといふ思想の見方をするか、此肝要なる問題を提供して居るものといふ事も出来る。……これ即ち日米共同宣言は<sup>しらざしらす</sup>不知不識の中に日本をして英米側の思想の流れの中に一層深く足をふみ入れしむるに至った徴象である」。吉野は、明らかにアメリカや英仏に「道義」を認め、その流れに乗ることを積極的に肯定し、その道を示すことを義務と意識していた。

して見れば、世間には随分独逸カブレの説もあるに拘らず、矢張り日本国民の思想は不知不識世界の<sup>どいつ</sup>大勢に押されて、略ぼ其方向を誤って居ないと言ふ事が出来る。更に之を意識的に確乎たる決心を以て進ましむるは将来に於ける識者の責任でなければならぬ<sup>23)</sup>。

その後の歴史の経過を見ると、結局、吉野が正しく福田が誤っていたように思える。しかし、その評論に即して考えるなら、一概にそうとも言い切れない。福田が主張したのは戦後世界が平和へと向かうのではなくアメリカのオートクラシーが増し、日本とアメリカとの軋轢が増大するから、アメリカの国際政治におけるパワーをこれ以上強めない、少なくともアメリカとの戦争へと進まないように日本外交は細心の注意を払うべきだ、というものだった。福田がもっとも恐れていたのは対米戦争だった。そこへと進んでいくメカニズムに日本が巻き込まれ

ないようにしなければならない、という冷静な判断がそこにはあった。平和主義や国際正義の名のもとにアメリカのパワーを強化することはそのメカニズムを強めることに通じている。彼はそう考えていた。これはこれで、バックス・ブリタニカやバックス・アメリカーナに対する一つの態度であろう。

しかし、武力による国際正義の貫徹というグロティウス主義的立場をとっていたアメリカが第二次世界大戦で勝利し、国際連合を設置して戦後世界をリードすることになったのは事実である。ここから見る限りでは、吉野のようにアメリカと歩を同じくするのが賢明だった、という事実は否定できないであろう。むろん、それはアメリカの正義に従う、少なくともそれと根気よく付き合うということでもあった。ドイツの潜水艦戦に対しドイツを「人類の敵」と断じ、その戦いをともに担うか否か、という二者択一的方式を求めたウィルソン大統領のスタイルに福田は危険性を感じ取っていた。ところが、吉野はその「真面目な思想」の側面を重視し、ドイツを不正義とすることにほとんど疑問を示さなかった。アメリカの覇権主義的側面には鈍感だったとさえいえる。国際社会における平和主義、協調主義、正義が実は英米にとっての平和主義、協調主義、正義でしかない、という認識や不信感は吉野にはほとんどない。第一次世界大戦は、正義と侵略の戦いだったと彼は考えていた。それゆえ、彼にとって、英米とくにアメリカとの協調が正義を基調とする国際社会との協調と根底においてはほぼ同義だったのかもしれない<sup>24)</sup>。

戦後日本は、平和主義と国際協調主義を表看板にしてきた。それは、国連重視といいつつも、明らかにアメリカや英国との平和・協調を実質的に意味してきた。福田徳三が戦後ほぼ完璧に無視され忘れられたのに対し、吉野作造がいまなお高い評価を受けている理由の一端は、日本におけるこの戦後国際政治の基本姿勢にあるといつてもよいだろう。だが、その前提にあるのは、平和主義・国際協調主義とアメリカ・英国外交の一体化である。もしその間に亀裂が生じるならば、その間隙の意味を考えることが必要になる。

21世紀は、その間隙の意味を考えなければならない時代として始まったように思える。国際政治の最初の転換期に生きた福田徳三は、その間隙を見抜き、その

うえで独自の国際政治思想を展開していた。そのために、福田は、大正デモクラシー期の著名な思想家であったにもかかわらず、第二次世界大戦後はほぼ忘れられてきた。この時期の政治思想家として吉野作造が傑出しているのはいまでもない。しかし、福田の国際政治思想もまた等しく重要である。国際社会は、いま大きく揺らいでいる。その否定的側面を含め、福田の国際政治思想に再び光をあてる時が来たのではないだろうか。

- 1) 与謝野晶子『与謝野晶子評論集』(岩波文庫), 1985年, 193頁.
- 2) この著名な詩の第一連はつぎのとおりである.  
 ああをとうとよ, 君を泣く,  
 君死にたまふことなかれ,  
 末に生まれし君なれば  
 親のなさはまさりしも,  
 親は刃やいばをにぎらせて  
 人を殺せとをしへしや,  
 人を殺して死ねよとて  
 二十四までそだてしや(同前, 26頁)
- 3) 同前, 193-4頁.
- 4) 福田徳三「何の為に戦ふ」(『太陽』1918年3月号, 4頁), 福田徳三『黎明録』大鏡閣, 1919年, 437頁.
- 5) 同前, 438頁.
- 6) 同前, 440頁.
- 7) 柿崎正治「戦後の世界がどうなるかをどうするか」『中央公論』, 350号, 1917年, 4頁.
- 8) 福田徳三「ホッブスとグローシアスとを論じて柿崎博士の空想的世界観を排す」(『中外』1918年), 福田徳三『黎明録』117頁.
- 9) 同前, 134頁.
- 10) 同前, 146頁.
- 11) 同前, 151頁.
- 12) 同前, 163頁.
- 13) 福田徳三「自主的出兵よりも自主的平和=日本須く断乎として講和を主張せよ」(『中外』大正7年9月号), 福田徳三, 同前, 475頁.
- 14) 福田徳三「欧州出兵論を排す」(『日本及日本人』1917年11月号), 福田徳三, 同

- 前, 413頁.
- 15) 福田徳三「ウエルソンの教書と日本の国是」(『大日本』1918年1月号), 福田徳三, 同前, 432頁.
- 16) ヘドリー・ブル(白杵英一訳)『国際社会論 アナーキカル・ソサイエティ』岩波書店, 2000年. 参照, 山内進「グロティウスの伝統—国際法思想史と国際社会」一橋論叢122-4, 1999年. 同「グロティウスと二〇世紀における国際法思想の変容」『変動期における法と国際関係』有斐閣, 2001年.
- 17) 姉崎正治「戦後の世界がどうなるかをどうするか」『中央公論』350号, 1917年, 9頁. 参照, Henry Steele Commager, Documents of American History, Vol. II, New York, 1963, p. 128ff.
- 18) 同前, 3頁.
- 19) 姉崎正治「大戦の終期と戦後の新局面」, 姉崎正治編『大戦と戦後の新局面』博文館, 1917年, 200頁.
- 20) 同前, 201頁.
- 21) 福田徳三は、「対抗か順応か=資本的侵略主義に抗し, 真正のデモクラシーを發揚せよ」(『中央公論』1919年1月号)で, 新しい潮流に対する考えを示している。「対抗と云い順応と云ふも要するに程度の問題である. 日本が如何に世界の大勢に拮抗して行かうと思つても, 夫れが世界の大勢である以上は, 全然之を拒否することは不可能である. 結局順応となる外に途は無かるう. 然し一切万事を抛つて世界の大勢に順応する外は無いかというに, 夫れでは無論可<sup>い</sup>けない. 大体に就いては順応する外は無<sup>い</sup>にしても, 日本は日本独特の立場から, 順応しつつも亦之に対抗して行かなければならない」(『黎明録』483-4頁)と. 対抗するために打ち出されたのが「真正のデモクラシー」である. これについては別の機会を持ちたい.
- 22) 吉野作造「米国大統領及び英国首相の宣言を読む」(『中央公論』1918年2月号), 『吉野作造選集5』岩波書店, 1995年, 283-4頁.
- 23) 吉野作造「日米共同宣言の解説及び批判」(『中央公論』1917年12月号), 同前, 264-5頁.
- 24) 吉野はアメリカの第一次世界大戦への参戦について, 「損得を超越した崇高なる國際的正義を自覚したからだ」(「國際連盟は可能なり」『六合雜誌』1919年1月号, 『吉野作造選集6』岩波書店, 1996年, 11頁)と述べている. ウィルソンへの信頼と平和主義への移行への期待は「帝國主義より國際民主主義へ」(『六合雜誌』1919年7月号, 『吉野作造選集6』所収)でも鮮明に伝えられている. むろん, 吉野は, 普遍主義の意味での平和や國際正義の展開との関連でウィルソンを評価しているのであり, アメリカ外交の具体的な評価は別である.

(一橋大学大学院法学研究科教授)